校長室だより～燦燦～ №２９９

本当の教育

2021.2.20

私の母校は、小学校が学年２クラス、中学校が３クラス、高等学校が１０クラスだった。教員になってからは、１校目の小学校が学年２クラス、２校目の中学校が９クラス、３校目の中学校が８クラス、４校目の中学校が７クラスだった。

学校と言えば、学年２クラス以上あるのが当たり前だと思っていた。それが自分の中での基準になっていた。体育館に全校生が集まれば、それ相応の規模になるのが、ごく普通の光景だと思っていた。

ところが、イタリアのローマ日本人学校は、小学部と中学部を合わせて約５０名ほどしか児童生徒がいなかった。集会で全校生が集まってもこぢんまりしていた。ローマには観光客としての日本人は大挙して押し寄せてくるが、現地に住んでいる日本人となると、決して多くはなかった。

学年は１クラスであり、人数は１人から８人ほどだった。自然と中学生が小学生の面倒をみるようになる。先生方も含めて、家族的な温かみのある学校だった。狭い日本人社会の中にあって運命共同体とも言えるようなものだった。私にとってのこの学校の位置づけは、特殊な環境における特別な学校というものであった。

日本に戻り、学年７クラスの中学校に勤務するようになり、すぐに以前の感覚は戻ってきた。チャンネルを元に戻しただけのことである。

その後、南会津の中学校に赴任した。そこは、学年１クラス、全校生徒５０名ほどの規模だった。それまでの私の基準には合わない小さな学校だった。体育館に全校生徒が集まると、余計に人数の少なさが際立った。

しかし、生徒にはパワーがあった。たくましさがあった。体格がよく、運動ができた。部活動というと、男子は野球部と剣道部、女子はソフトボール部と剣道部だった。女子のソフトボール部と剣道部は、県大会を勝ち抜き、東北大会に出場するほどだった。おかげで、青森県の八戸まで応援に行ったことがあった。

数年後、今度は奥会津の小学校に赴任した。そこには、かわいらしい小学生が１５人しかいなかった。複式学級もあった。クラスは１人から４人だった。４月６日の朝に全校児童と会ったのだが、全員が同じ“目”をしていたことが印象的だった。

１５人の子どもたちは、保護者はもちろんのこと、地域に守られ育てられていた。先生方も、包み込むような愛で、子どもたちを育んでいた。

また数年後、梁川高等学校に赴任した。生徒は１００人ほどしかいなかった。高校としては、小規模である。学年は２クラスであり、生徒は１クラスに２０名もいなかった。体育館に全校生徒が集まっても規模の小ささは変わらなかった。

生徒と先生方の距離が近い高校だった。先生方が生徒のことをよく把握している高校だった。校長でも、全校生徒の顔と名前を覚えられる高校だった。入学式や卒業式は、生徒数は少なくても他校と同じように、実に立派な式となっている。令和元年１１月２日（土）の創立百周年記念式典では、一人一人の生徒が大きく見えた。とても１００名ほどしか生徒がいない学校とは思えなかった。

大規模校には、大規模校のよさがある。大規模校にしかできないこともある。そのことは、今までの経験からわかった。その一方で、「本当の教育」と考えると、南会津の中学校、奥会津の小学校、そして梁川高校にこそ、それはあるのではないかと思うようになった。

児童生徒が少ない分、先生方は一人一人のことをよく把握して、その子に合わせた教育を行っているのではないか。私が勤務してきた３つの小規模校に共通していることの一つに、子どもにとって学校の存在が大きいということが挙げられる。そう考えると、ローマ日本人学校も特別な学校ではなく、本当の教育ができる学校だったことに気づかされる。ローマの子どもたちにとっては、学校が、それこそすべてだった。梁川高校に来たからこそ考えさせられたことであり、わかったことである。